MATSUMOTO SEICHO MEMORIAL MUSEUM

松本清張記念館

◆館報◆
2006. 12
第23号

きみはいつから、そんなずぶとい女になったんだ？

「黒革の手帖」は「週刊新潮」昭和五十三年十一月十六日号から五十五年二月十四日号まで連載された。

『黒革の手帖』初単行本 新潮社
昭和55年6月（上下とも）

現在入手できる本
『松本清張全集』第42巻（文藝春秋）
『黒革の手帖』（上）（下）新潮文庫（新潮社）

作品紹介

元子は銀座にバーを開いた。店の名は「カルネ」、"手帖"という意味のフランス語である。由来を問われれば古い映画の題名と答えるが、それは建前。開店資金のもととなり、元子の第二の人生を拓くきっかけになった「黒革の手帖」が本当の由来である。

黒革の手帖――銀行に勤めていた時、架空名義預金者管理名簿を写し取ったものだ。本来あってはならない架空口座は、銀行にとっては公表されては困る存在。この手帖が横領金の返還を求める上層部への切り札となったから、勝利の記念に「手帖（カルネ）」と付けた。

カルネには地位のある客が来る。夜の灯りは男達の裏の顔を照らし出す。脱税、裏金、隠し口座――元子は彼らの秘密を探る。新たな黒革の手帖のページが増える。恨みを買い、敵を増やしても、後ろ盾などなくても女ひとりで堂々と勝負ができる面白さに目覚め、野心を膨らませてゆく。

銀行時代は白い壁の中で伝票と算盤に向かい合うだけの味気ない毎日だった。どんなに真面目に働いても、出世の道も夢も無かった。世の中がこんなに色彩豊かだとは知らなかった。もっともっと大きな店を手に入れたい。銀座で一番の店を自分のものにしたい……。慎重に計画を練った。だが、いつのまにか元子は老獪な男達の掌の内にいた。

（学芸員　小野　芳美）

目次

●開館八周年記念講演会
山本一力講演会……2
●企画展紹介「松本清張の印刷所時代」……5
●清張原風景「点描」……5
●展示品紹介……6
●探検！清張記念館……6
●友の会活動報告……7
●みんなの広場……7
●トピックス……8

開館八周年記念講演会

●平成十八年八月四日（金）
●北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」二階ホール

山本一力
「生き方雑記帖」

■プロフィール
昭和23（1948）年、高知県に生まれる。昭和41年、都立世田谷工業高等学校電子科を卒業。会社員を経て平成9年、「蒼龍」で第77回オール讀物新人賞を受賞。平成14年には「あかね空」で第126回直木賞を受賞。その他の著書に『ワシントンハイツの疾風』『辰巳八景』『銭売り賽蔵』などがある。最新刊は『背負い富士』（文藝春秋社刊）。

清張作品の思い出

松本清張記念館開館八周年という記念すべき時にお招きいただき身にあまる光栄であります。私は昭和二十三年に高知県高知市で生れました。まだ私が高知にいた昭和三十年代の初めの頃、もう清張さんは十分に人気作家でした。子供ながら忘れられない想い出が一つあります。まだテレビが本当に珍しい時代で、ラジオが世の中の主流でした。その頃、清張さんの『わるいやつら』がラジオドラマで毎日放送されていたんです。私は小学生でした。その『わるいやつら』という題名が気持ちを大きく刺激しました。いつも大人から「あほか、お前は悪いやっちゃー」と言って、いたずらをやると怒られた。それが、ラジオで堂々と毎日『わるいやつら』と言っている。そのことが非常に不思議だった。耳から入ってきた『わるいやつら』は本当に忘れられませんでした。

また、中学三年で上京し、新聞屋さんでバイトをしていた時から、本を読むことは、一番身近にある娯楽でした。清張さんを好きで読み始めたのは、私が高校生の頃でした。国語の教師が大変な清張好きな方で、生徒に向かって、「お前たちももっともっと本を読め、とにかく本を読め」それしか言わない先生でした。圧倒的に強く勧められたのは、岩波文庫でした。で、その傍らで、松本清張を読め。今の時代がどういう時代であるか、清張の小説を読めば分かる。その国語の先生の影響もあり、もともと子供の頃から本を読むことは好きでしたから、そこから読み始めて、社会人になった後も、常に私は松本清張さんの本を買いまくっていました。

初めて私が本気になって最後まで読んだ時代小説は、忘れもしない「かげろう絵図」です。長編です。こんなに面白いのかと本当にびっくりしました。あっという間に読みました。それで、時代小説の面白さに目覚めて、次は「天保図録」。文庫本で、上・中・下の三巻に分かれていたと思います。それを全部買い込んで、とにかく読みまくった。私は勤めていた旅行会社の中では本好きだと知られていましたので、読み終わるなり「かげろう絵図」と「天保図録」をもう薦めまくりました、皆に。

清張さんのやさしい眼差し

清張さんが残してくれた多くの作品と同時に、直木賞をいただいた後で、多くの編集者から、清張さんの、本当の超がつく一流作家としての生き方、創作の姿勢、ものごとの考え方、人との接し方、様々なことを教えられました。松本清張記念館の館長でいらっしゃる藤井さんからもいくつもお話を伺いました。

伺ってきた話の中で、大変に感銘を受けた話が、清張さんが大変に綺麗な字をお書きになる、そのことです。もともと字が上手なのでしょうが、心してきれいな字を書いておられたそうです。「先生、大変きれいな字をお書きになりますね」とある編集者が言った時に、清張さんはその若い編集

者を「ちょっとこっちに来い」と脇に呼ばれて、「君は簡単にきれいな字というが、なぜ私がこういう字を書くか。そこまで考えてくれたことがあるか」と問われたんだそうです。編集者は答えに詰った。「ちょっと、私と一緒に来い」と言って、清張さんはそのままご自宅から、印刷会社へその人を連れて行かれたんだそうです。

そこは、活字が部屋一面の棚になっていて、「あいうえお」から漢字まで、数字も含めてすべてのありとあらゆる文字が大きさ別に、また書体別に活字として並んでいる、いわゆる組版のもとの部屋だったんだそうです。活字を一個ずつ引っこ抜いてはそれを組んでいく。文選工という職種の方が当時はいたんだそうです。で、全体を見渡して、「見てみなさい、この部屋を」と清張さんは言われた。多くの文選をする職人さんが忙しく立ち働いていた。「あの人たちはここで、私が書いた原稿の文字を拾ってくれている。見てわかるように、部屋はそんなに明るくない。少しでも彼らの仕事の邪魔をしないように、少しでも早く仕事をやってもらえるように、作者としてできることは、読みやすい字を書くことだ。仕事は自分一人がやるわけじゃない。私は原稿を書いている。でも、その書いた原稿をこうして文字を拾ってくれる人たちがいる。それが、ゲラ刷りになって出てきたら、私はそれに赤字を入れて返さなければならない。そしたら、一度組んだ版をもう一度組み直すことになる。また、同じ仕事をこの人たちにしてもらうことになる。それを思ったら、少しでも読みやすい字を書くことが作者として、一番人のためにできることだ」と、若い編集者は文選の現場で教えられた。今はもう定年を過ぎて評論をしておられる方です。若い頃に清張さんから教えられたことが、ずっと自分の体の中に残っているそうです。

その話を伺って、私も本当に襟を正すと言いましょうか、背筋が伸びる思いがしました。清張さんって、作品の中で説教めいたことは言わなくても、人の苦しみだとか、下積みにいる人たちに対して、誠にやさしい眼差しをもっておられる方なんだ、とものすごく強い感銘を受けました。

相手を主語にしてものを考える

私は四年間、高校を卒業するまで新聞配達を続けることが出来ました。思い返すと、出来た理由はたった一つだったと思います。人の情けというものを中学三年の子供ながらに受け取ることが出来たからです。

少し時期が戻ります。十一月の初めぐらいだったと思います。私が新聞を配っていたのは渋谷区の、大山町と西原という両方とも坂がいっぱいある屋敷町です。そのど真ん中に火葬場があって、その敷地の中に焼き場の従業員の方の宿舎が長屋のように並んで建っていました。そこへ新聞を配るんです。

秋の朝、たったたと入っていったら、そこで、玉砂利の上の木の葉を掃除していた親父さんが私を呼び止めて、ちょっと待ちな。これでも食いなよ。くれたのは饅頭でした。腹ぺこぺこですから、もらった饅頭のうまかったこと。次の朝、また呼び止められて、これ食いな。今度はらくがんです。火葬場ですから、お供物の菓子は毎日あるんです。うれしかった。そうやって少しずつ交流ができて、朝の挨拶をするようになった。月に一回の集金に行くと、今度はそこの従業員のおかみさんが、暖かい甘いコアをつくって飲ませてくれたんです。寒くなっても頑張んなさいね。人の情けが身にしみるなどと、まだ小僧ですからそんなことには思い至らなかったんですが、でも、その振舞ってもらえたことが本当にうれしかった。

クリスマスの朝、十二月二十五日の朝、真冬の真っ只中、五時半ぐらいですから、本当にまだ闇の中です。一軒の家へ新聞をとんっと入れたら、そのポ

ストの中に新聞がストンと落ちるその音で、その方の家の戸ががっと開いて中から、そこの奥さんが出てこられて、「クリスマスおめでとう」と言って、プレゼントをくれたんです。これは、本当にビックリしました。高知で、暮らしていたガキの時分、貧乏だったにもかかわらず、親はなんとか金を工面してクリスマスの朝に、お菓子の詰った銀の長靴を、私と妹の枕元に置いといてくれました。でも、全くの他人様から「クリスマスおめでとう」と言ってプレゼントをいただいたのは、本当にその時が生まれて初めての経験でした。包みを開けたら、中にハンカチが入っていました。四年間、新聞配達が終わるまでずっと続きました。

あの底冷えのする真冬のクリスマスの朝、配達をしているその子供のために、「おめでとう」を言ってねぎらう、ただそれのために芦原さんは待っておられた。恩返しは、全く期待されておられなかったでしょう。そんなこと期待したら、絶対に、人に情けを示すことなどできません。自分が主語ではなしに、相手を主語にしてものを考えるからこそ、こういう尊いことができます。

私が深く敬愛する池波正太郎さんは、「自分の著書の中で、「恩は着るものであって、着せるものではない」ということを何度も何度も書いておられます。人生の生き方を決定付ける至言であると思います。本当に恩は着るものです。「何々してやったからな」などというものではございません。しかし、人にしていただいたことは、その時には気づかなくても、ずっと後になってふと分かる日が来るものです。

今の日本は、先程も申し上げた、自分が主語になって、自分さえ良ければと言うような、嫌な現象がそこここに見えます。見えますが、私は決して悲しんではいません。日本人の本来は、そんなものではないんです。日本人の本来を例えて言うならば、君は文選工がどういう場所で仕事をしているか見たことあるかと、若い編集者に言ったのみならず、その人を連れて現場に行かれたあの清張さん、恩は着るものだと言い切っている池波正太郎さん、こういうすばらしい先達がいっぱい生きています。また、生きてこられました。日本はそういう国です。

清張から井上ひさし氏へ、そして山本一力氏へ ―五年間注文の来つづける作家でいるように

物事は、何によらず、表側と裏側が背中合わせになっています。表側がおいしそうに見えたら、その裏側にはおいしさを味わった後に負うべき責任が必ずくっ付いています。人はおいしいことだけをつまみ食いして生きていくことは、出来ません。直木賞をいただいた後で、本当に強く思い知りました。毎日そのことを感じております。お話を閉じるにあたって、直木賞をいただいたことで、私が自分で感じているそのことをお話をさせていただきます。贈呈式が始まるに先立って、その時の選考委員長であった井上先生（井上ひさし氏）からお言葉をいただきました。「向う五年間は、注文のあった原稿は何も断ってはいけない」五年の間、断らずにそれをやり続けていったら、五年経った時には、名前の残る作家になっている可能性がある。私はそのことを、自分が直木賞をいただいた時に、松本清張さんからいただいた。それを今日あなたに渡します。心してやりなさいというのが井上先生の言葉でした。

年季奉公が明けるまで、後半年です。名前の残る物書きを目指して、ひたすら書き続けています。その中で、井上先生が言われたことの本当の意味がようやっと分かるようになりました。五年間注文を断るなと井上さんは言われた。でもそれは、そうじゃなかったんだと私は、今は思っています。注文を断るなではないんです。注文が来続ける作家でいろとおっしゃったんです、きっと。

直木賞をいただいて、もう四年と半分が過ぎた今、もうわき目もふらずに、ひたすら原稿を書いています。とにかく、原稿を書き続けていることで、それがまとまって本になる。一生懸命小説を書いていれば、読者に読んでもらえるチャンスも増えてくる。読者が読んでくれて面白いねという評価をいただけたら、本が売れて、また出版社から注文が来るようになる。つまり、五年の間注文が来続けるということは、それだけの間読者から見放されないように、原稿をしっかり書き続けていろよということだったんです。やってみて、どれほどありがたい忠告だったか。その忠告のもとが、松本清張さんから出ていたんだとすれば、それは本当に私の物書きとしての一生を左右する言葉です。

松本清張記念館平成十八年度特別企画展

松本清張の印刷所時代

清張が職業人としての自立を目指して過ごした印刷所時代。自身の印刷所時代について、清張は「半生の記」に回想を記していますが、その他の記録はほとんど知られていませんでした。本企画展では、調査で明らかになった清張の印刷所時代と、印刷所やその職人が登場する作品を取り上げます。とりわけ修行から自営に至るまでの勤務先であった高崎印刷所については、詳しい情報や資料をご紹介します。

昭和の初め、不況の波を受け電気会社が閉鎖したために失職した清張は、得意だった「絵に関係したことならできそうに思え」、十九歳の見習いからスタートし画工の道を歩みます。必死に仕事を覚え働き詰めの時代でしたが、技法の習得や図案の腕を磨く修練も怠りませんでした。その一方で、光を求めて文芸に親しみ、時代の変化を敏感に受け取りながら、新たな世界を志向していた一面にも触れたいと思います。

印刷所の画工職人という仕事は、プロフェッショナルとしての覚悟を清張に植え付けました。それは、後に作家として見せた仕事への姿勢と通底するものがあるのです。

石版石

期間 平成19年1月18日（木）～3月31日（土）

会場 松本清張記念館 企画展示室（地階）

清張原風景 点描

香春口（かわらぐち）

「香春口からは鉄道馬車が北方という町まで往復していた。その香春口の電車の終点近くに木造の古い教会があった。

のちになっての知識だが、鷗外がフランス語を習いに行っていたのがこの教会だった。鷗外の『小倉日記』には、そこの神父だったフランス人ベルトランとの交遊が書かれている。」（「半生の記」）

江戸時代、小倉は九州各地とを結ぶ一つの交通の起点であった。小倉城下町から田川郡香春方面に通じる街道への出入口の門を香春口門といい、この周辺を香春口と呼んだ。「春」をハラ、「原」をハルと読ませるのは九州の特徴であると清張は「鷗外の婢」に記している。

香春口現風景

明治三十九年、レールの上を馬に引かせ、通常の馬車よりも速く走る鉄道馬車が、香春口と城野の間で開通し、翌年北方まで延長された。北方には兵舎があったため、日曜日ともなれば満員馬車にぶら下がって小倉の町に遊びに出る兵士の姿がみられたと言う。清張は子供の頃、扁桃腺炎になり、母親にこの鉄道馬車でのど専門の漢方医のところへ連れて行ってもらった。そして清張が尋常小学校に通っていた大正九年には北方線は電化され、昭和五十五年十一月に廃止された。

香春口門の説明板

香春口にあるカトリック教会には、ベルトランというフランス人宣教師がいた。森鷗外がフランス語を習うため週に何度も熱心に通っていたこと、また、フランス語を習いにくる人は沢山いたが、ものになったのはドイツ語の素養があった森鷗外だけであったこと等が、「或る『小倉日記』伝」に記されている。

現在の香春口は、北方線の代替機能を担い昭和六十年に開通した北九州モノレールが走り、その下を小倉の南北を縦断する片側三車線の道路が延びており、小倉の交通の要衝としての姿がうかがえる。

（碇　政幸）

カトリック小倉教会

展示品紹介

転勤希望の手紙

松本清張の生涯をつぶさに見ていくと、常に次なる世界へ挑戦する姿勢を感じる。作家としても、亡くなるまで停滞を好まなかった。と同時に、無謀な選択というものがないのもまた清張である。

「転勤希望の手紙」は、昭和二十八年に朝日新聞東京本社の広告部長・矢野氏宛てに書かれたもの。内容から、この手紙に先立ち「転勤希望」はすでに伝えてあり、「ご高配」へ応える形で当時の心境が綴られている。

一度、そういう希望をもちますと、妙なもので一日も早く、という気持にかられます。殊に、山名さんや電通の新井さんなどに会うと、アド・デザイナーとしての野心のようなものが起ってきています。この方面でも伸び度い気持です。

それから、率直に小生の心を申し上げますと、文学の方でも成長し度いのです。御承知のようにジャーナリズムというものは浮気なもので、東京を離れた地方に居ると、どうしても忘られ勝ちで、次々と新しい受賞者や新人が出てくると完全に抹殺されます。

「山名さんや電通の新井さん」とは、デザイナーの山名文夫と電通技術グループを発足させた新井静一郎であろう。清張が九州のデザイナーとして頭角を現し始めていたことは山名氏の著書でも触れられている。

一方、文学への希望がむしろ本音ではないかと思われる。「この十年」で清張は当時を次のように振り返る。〈地方にいて芥川賞作家だというと、たちまち「地方名士」になりかねない。それがイヤだったし、突然変異的ながらこうなった以上は、東京に出てやれるところまではやってみたいと思った〉しかし退社する勇気はなく、本社勤務を希望する。原稿依頼の少ない当初のことを〈私は四十五歳になって、人生に大きくつまずいたような気がした〉と記している。

書簡の後半では、四月に佐藤春夫、久保田万太郎、木々高太郎、丹羽文雄らの発起で芥川賞祝賀会が行われるため上京すると書いている。この会についても興味が湧くところである。

（学芸員　柳原　暁子）

きよしとハルコの 探検！清張記念館

1F “「上空から見た松本邸」パネル”の巻

きよし　ねえ、この庭で仁王立ちしている人物、清張本人だよね。ちょうどよいタイミングで電車も通過してるし、偶然写ってるわけじゃないよね?

ハルコ　雑誌の取材用に撮った写真らしいわよ。

きよし　それでカメラ目線なんだ。この距離から見ても、髪はぼさぼさで、身なりに構ってない感じだなあ。

ハルコ　この年の清張は海外取材も頻繁に行っているし、寝る間もなかったんじゃないかしら。

きよし　心なしか、車窓の人々が「これが清張の家かー」なんて言いながらのぞき込んでるようにも見える。

ハルコ　まさか垣根のむこうに清張がいて、一緒に写真に収まってるなんて思いもよらなかったでしょうね。

きよし　それにしても電車がこんなに近くを走っていてうるさくないのかな。
長者番付の作家部門一位になった年に建てた豪邸だよ。もっといい場所があったんじゃないかな。

ハルコ　それが、あえてここを選んだみたいよ。
執筆にも睡眠のときも全く気にしなかったどころか、終電の音を聞きながら「あぁ、自分のほかにもまだこんなに頑張って働いている人がいるんだ」と、執筆の励みにしたそうよ。

きよし　いつも市井の人の目線でいた、清張らしいエピソードだね。

昭和43年撮影の松本邸。走っているのは井の頭線。展示室1入り口にある東大寺礎石も写っています。
当パネルは再現家屋手前の連絡通路を渡ったところにあります。

友の会 活動報告

● 平成18年度年次総会(8月4日(金):参加者41名)

男女共同参画センター・ムーブで平成18年度年次総会を行いました。

任期満了に伴う役員の改選、平成17年度事業及び決算報告、平成18年度事業計画及び予算案などについて審議され、いずれも承認を受けました。

● 清張サロン(9月27日(水):参加者19名)

梅光学院大学教授小林慎也先生の講師で「無宿人別帳」をテーマに、清張サロンを行いました。「無宿」についての定義や作品の視点、他の作品との関連などについて講義が行われ、参加者からも作品の感想や意見、質問など活発な発言がありました。

● 世田谷文学館見学、明治座「黒革の手帖」観劇

(10月21日(土)～23日(月):参加者18名)

今回は世田谷文学館(東京都世田谷区)を訪問しました。平成7年に開館し、明治以降の世田谷区にゆかりのある文学と、文学者に関する資料等を収集・展示している文学館です。見学時は企画展「宮沢和史の世界」展を開催中でした。

また世田谷文学館友の会会員との勉強・交流の場も設けていただき、事業内容や友の会の運営についてご教示いただき、意見交換も行いました。

翌日は明治座で舞台「黒革の手帖」を観劇しました。生で見る演技の迫力に、会員も引き込まれている様子でした。

友の会会員募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間で3,000円となっております。

■友の会事業

- 講演会、シンポジウム等の開催
- 読書会、文芸講座等の開催
- 松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など
- 映画ビデオ等の上映会の開催
- 会報の発行

■会員特典

- 常設展の招待券(年間4枚)進呈
- 企画展(年2回)のご招待
- 記念館主催事業のご案内・参加
- 記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈
- 友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- 友の会オリジナルグッズの進呈(加入年度のみ)
- 喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引

友の会入会のお申し込みは… TEL.093-582-2761　松本清張記念館友の会事務局まで

みんなの広場

今回は、最近お寄せいただいたアンケートの中から、記念館を訪れてみての感想を掲載しました。

- テレビ、映画で「砂の器」を見てから興味をもちました。子供の頃は全然分からなかった作品の主張を発見することができ、また記念館で勉強させていただき、これからどんどん作品を読んでいきたいと思いました。(30代・愛知・男)

- これまで全く清張及びその作品にも興味がありませんでしたが、あるきっかけで、少し勉強してみようと思って参りました。その生涯や考え方、作品にとり組む姿勢を知ることができ、これまでよりもぐっと身近な存在になりました。作品も読んでみようと思います。(30代・神奈川・女)

- 2階 の書斎を見られるのは、めずらしい企画でよかった。小説だけでなく、絵も描き、書も立派なのに感嘆した。(60代・愛媛・女)

- 落ち着いた展示で清張先生の偉大さを改めて再認識した。特に自筆原稿、スケッチ等はすばらしい。(70代・新潟・男)

- BGMなども合っていてとても居心地がよかったです。「砂の器」は松本清張の作品だとは知りませんでした。興味深いものばかりで楽しませてもらいました。ありがとうございました。(10代・市内・女)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見をご紹介しております。
清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。
皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。
※アンケートは館内にも置いてあります。

研究誌販売書店のお知らせ

年1回発行の『松本清張研究』は、
記念館ミュージアムショップのほか
北九州・東京の主要書店で販売しております。

［北九州市内］

・喜久屋書店小倉店
・ブックセンタークエスト小倉本店

［東京］

・三省堂書店神田本店
・ジュンク堂書店新宿店
・東京堂書店神田本店
・芳林堂書店高田馬場店
・丸善丸の内本店
・八重洲ブックセンター八重洲本店

また、通信販売も受け付けております。
お問い合わせは記念館まで。

松本清張と交友をもたれた方へ

松本清張と取材や会食等でご一緒されたことのある方は記念館までお知らせください。些細なことでも結構ですので、エピソード等の情報をお待ちしてます。

イラスト：山藤　章二

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL　093（582）2761
FAX　093（562）2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制 作　（株）エディックス

●開館時間　午前9：30～午後6：00（入館は午後5：30まで）
●休 館 日　年末（12月29日～12月31日）
●観 覧 料　一　般／500円（400円）　中・高生／300円（240円）
小学生／200円（160円）　（　）は30人以上の団体
●アクセス　JR：　小倉駅から徒歩15分　西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です（小倉城・松本清張記念館前下車）
車：　北九州都市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館

第8回 松本清張研究奨励事業奨励金贈呈式

平成18年8月4日に第8回研究奨励事業奨励金贈呈式が行われました。『隠花の飾り』英訳で入選を果たした米国・ポモナ大学準教授栗田香子さん、米国・（有）メタフォリア社長ジェイムズ・リプソンさんに奨励金50万円が贈呈されました。

第9回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対　　象　①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

内　　容　入選者（団体）に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法　今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料（様式は自由、ただし日本語）を、平成19年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

●編集後記●

1年が経つのは早いものです。40年間で1,000作品以上を執筆した清張の集中力はすごいですね。我々スタッフも密度の濃い仕事をしていきたいと思います。2007年もどうぞよろしくお願いいたします。

（碇　政幸）